

生死一如

―特別攻撃隊戦記(一)―

茨城県 長沼 武治

私の人生は、海軍航空隊とその基地である生地・阿見町と現在までつながっていると思う。大正十年九月二十二日、旧舟島村(現阿見町掛馬)に生まれた。従って霞ヶ浦海軍航空隊の飛行機の爆音を聞きつつ育ったのである。

掛馬地区の霞ヶ浦との間には堤防はなく、菅場が広がって南側に水田があり、三年に一度は水害に見舞われる。我々も子供の時から風呂の水汲み、弟や妹の子守や飯炊きもしなければならない。高等小学校に進む頃には休日(農具を担いで田圃に出る。腰は痛い、手にマメができるが、親に口答えをしたことはなかった。また養蚕の季節になれば、学校を早退して手伝わねばならぬ。四男二女の長男に生まれた私は「百姓の長男

には百姓だ」のこの地方の常識に疑問がでてきた。

昭和十三年七月、豪雨と長雨が続き、また水田が冠水し「また水にとられるのか」と、自然の力に勝てない農業の将来に不安を感じていた時、地元の、横須賀海軍軍需部霞ヶ浦軍需支庫の軍需部で、十人前後求人しているという話を聞いて受験したが、私の人生を変えることとなった。十二月に採用され機体班に回され、これが私の直接飛行機との接触の始まりであり、それが、海軍航空隊、予科練入隊へとつながるのである。父は当初反対したが、自分も若い時私と同じような考えを持ち軍需部勤務をしたので、ようやく許可をしてくれたのであった。

私の軍歴の概要は次の通りである。

軍需部採用後、昭和十六年九月、支所は第一海軍航空隊と合併し仕事は厳しくなったが、南方出張工員募集があり、私は昭和十七年五月に横須賀海兵団入団が決まっていたので、その日までに帰ればと、輸送船で比島爆撃前進基地の高雄で爆弾輸送に従事し、大戦突入は朝礼で知らされた。

高雄の第六十一航空廠ではパイロット・飛行班の事務を担当した。

昭和十三年十二月十六日 横須賀海軍軍需部霞ヶ浦軍

需部支庫備人兵器手として勤務

昭和十六年九月一日 右軍需部は第一海軍航空廠とな

り一等工員となる

同 年十二月一日 南方〇〇派遣工員

同 五日 台湾高雄州岡山街第六十一航空廠勤務

昭和十七年六月十五日 第一海軍航空廠

同 年九月一日 海兵団入団

同 年十二月一日 岩国海軍航空隊入隊、丙特十

四期飛行予科練習生予定者

昭和十八年一月三日 丙種飛行予科練習生(第十四期)

操縦分隊入隊

同 年三月三十一日 第三十一期飛行練習生(飛

練)として高雄海軍航空隊入隊

同 年九月 右卒業と同時に実用機教程に進み新

竹航空隊入隊

同 年十二月三十日 右卒業。一等機関兵から一

等飛行兵へ

昭和十九年一月二日 筑波海軍航空隊操縦教員練習生

同 年三月 卒業と同時に第二美保航空隊(鳥取

県米子)転属

同 年四月 第十三期予備学生の操縦教員助手。

第一期予備生徒の教員助手

同 年十二月一日付 第七〇八飛行隊(別名輝へ

かがやき)部隊。基地は鹿屋航空隊、状況により

宮崎航空隊、宇佐航空隊と転々、石川県小松基地に

移動訓練す

第七〇八飛行隊は雷撃隊であったが、同機種一式陸

攻であるため、神雷隊の第七二一空の消耗のため同隊

に包含され、桜花攻撃隊に参画。

終戦及びその後

戦後五十余年、昔の記録が甦った。笑って散ったあ

の友、弱冠二十歳前後の紅顔の美少年たち。生き残っ

た我々に何を頼み何を願っているのかと思う時、この

ことは忘れてはならない。知る限り記録として残し彼

等の死を無駄にしてはならぬとの思いを新たにす。

生死を賭けて修羅場に突入しても、各人各様人の歩みがある。その過程を述べ、私の人生の一端としたい。

語れば幾日語り続けても尽きることはないが、我々海兵団出身の兵から航空兵に選抜する内種飛行予科練習生の教育から、実戦においてその七七パーセントが戦没した実態を私の体験を通じて話をしたいと思う。

横須賀海兵団で三カ月の新兵教育、岩国海軍航空隊での四カ月の内種予科練習生の厳しい訓練、鍛錬を終え、昭和十八年三月二十五日、台湾高雄に向かい、今度は第三十一期飛行練習生（飛練）として六カ月間、通称「赤とんぼ」（九三式陸上中間練習機）教程を終え、新竹航空隊で実用機教程（九六式陸上攻撃機）の操縦訓練を受けた。

昭和十八年十月一日から十二月二十八日までの僅か三カ月間の訓練であったが、戦争も峻烈となり、南の空での航空機と兵員の消耗も日増しに加速され、我々の一日も早い飛び立ち（教程終了）を待っているため、自然と訓練も熱が入ってきた。

訓練中、米軍のP 38（双胴）ロッキード機やグラマ

ン機の奇襲攻撃に遭い、同期の練習生が撃墜され十数人が犠牲となった。敵機は中国大陸からの攻撃であり、これに一矢を報いようと、教官達が二日間、渡洋爆撃（九六式陸攻機）を敢行し、在支米空軍基地を攻撃したことがあった。その中に先輩や友人が数人参加した。

卒業式の前日、左マークの八重桜を頂いて、上等機関兵が、上等飛行兵となった。今までの七つボタンの制服から、ジョンベラ（セーラー服）に変わった。階級章の桜も空色に変わる。大部苦勞はしたが上等兵で高等科卒業の八重桜を着けるのは飛行兵だけである。僅か十銭玉（今の十円銅貨より章がやや小ぶりか）ぐらいの大きさのマークをもらうために十一月皿みどろの訓練（海兵団の初年兵時と比較にならぬ酷しさ）を重ねて来たのである。

教員達は卒業を祝福しながらも「左腕が重いだろう」と冷やかした。松本分隊長は「お前達は、これから各航空隊に配属されるが、一番若い航空兵だ、技量の錬磨に努め、お国の為に役立って欲しい」との訓示を別れの言葉とした。私は二十人の同僚と共に筑波航空

隊行きとなった。そこで入隊時の儀式と称しバッターの雨が一人三本宛、元旦早々の御馳走であった。

筑波空での作業内容は、戦争実施部隊の訓練でなく、九三中練の後席訓練で、操縦員の養成であった。満蒙開拓義勇軍養成の内原訓練所の日輪兵舎を下に見て、毎日飛行作業に追われたが、飛練の時のような苦痛はなかった。

三月一日付、第二美保海軍航空隊勤務となる。鳥取県米子近くの中海に面した村であったが、到着すると一面の銀世界で飛行機も飛べない。司令の高橋司令は当時一世を風靡して唄われた「月月火水木金金」の作詞家であった。

美保では最初、学徒出陣で入隊した第十三期予備学生五人の教育を務めた。私は「今日から貴男達の命を預かることになった。私は上等兵である。貴男達の方が階級では偉い。しかし、修者と教者という立場において指導する。嫌な者は今申し出て欲しい」と言ったが誰も黙っている。「私でよいと判断する、それでいいんだな……」。五人は納得したらしい。「飛行場は常

に戦場と違って真剣に今後の訓練に努力してもらいたい、終わり」と、半年前まで自分が耳にたこができる程聞いたセリフなのである。

第十三期予備学生の操縦教員としての初めての教務には、教えるより自分の腕を上げなければならぬ気持ちで真剣な作業を続けた。高雄では、連日の罰直（制裁）に泣いた訓練で上達できなかった。叩けばうまくなるわけではない。叩かれてもその理由の見当がつかない。その体験に基づき、学生一人一人の性格を見ること、上手にできれば褒め、悪ければその場で教えることを心掛け、予備学生は成績も良く一カ月繰り上げ卒業となった。この間、六月には兵長に進級し、風雲急を告げ、服装もカーキ色に変わり、戦闘帽着用となった。

その後も専門学校卒業者の第一期予備生徒七人を受け持って、赤トンボの操縦訓練を続けたのであるが、教えた彼等は二カ月後、南方の空で散華したとの噂が隊内に広まり、私はひそかに合掌した。

十二月一日付で私は実戦部隊である第七〇八飛行隊

付となった。行き先は鹿屋海軍航空隊で単独赴任であった。その時は二等飛行兵曹に任官してから一カ月後の転任命令であった。いよいよ、神雷部隊の特攻基地である。

鹿屋へ来て最初の日曜日外出の時、筑波空で講習生の時の駒場一飛曹に出逢った。「教員暫く」と言う。「いよいよ特攻隊だよ。昨日来たばかりだ」と言われる。当時「キの六七」と言う陸軍の飛行機に、海軍の偵察員を乗せる陸海共同の攻撃作戦もあり、外出員には陸軍の軍人も沢山いた。彼とはそのまま別れたが、案の定、二、三日して出撃し、勿論「梓弓（引きて返らぬ梓弓と楠木正行の歌の如く、出発したら帰還しない）」となってしまうた。

鹿屋基地の飛行訓練は、一式陸攻の操縦のサブ（副操縦）である。毎日の訓練は編隊飛行に重点がおかれていたが、いつ出撃命令が下るか知れぬ。事実、鹿屋へ来て一カ月間に、要務飛行あり、対潜哨戒飛行ありで飛び立ち、半分くらいの友が還らぬ状況となつてしまった。朝食を共にした先輩、同僚が、夕食時には還つ

て来ない。その還らぬ先輩同僚の遺品整理が、残った我々の仕事でもあった。実戦部隊の淋しさ、空しさが身に染みてこたえた。遠からず俺も行かねばならぬだろうと思うと、如何にしたら死ぬるかと言剣に考えざるを得なかった。

遺品整理をしながら笑っている友の写真を見て、事実死に際してこの顔で征けるだろうか？と疑問を持ち毎日悩んだのはこの頃からだった。「生死一如」生と死の境を無くするにはどうしたらよいか。

今、生きている。そして今死ぬ。この生死の境を恐れぬ精神の持ち方、これが軍人として当然であろうけれども簡単ではない。『葉隠』の一節「武士道とは死ぬことと見付けたり」というのを思い出した。さて、死ぬことと見付けたりはよいが、その期におよんで「笑って死ぬるか」「泣き泣き死ぬか」の二つがある。笑って往けば永遠に笑っていられるだろうし、泣いて散ったとすれば永久に泣いていなければならぬだろう。

では笑って死ぬにはどうしたらよいか？ この問題に

取り組んで私は私なりに、次の様な結論を得た。それは、「今生きている」と思わぬことだ。生あるものは必ず死ぬのだ。ただ早いか遅いだけの違いではないか、既に往って還らぬ自分より若い人は沢山いる。今朝の報道でも、私の教えた右橋石男少尉は隊長として往ってしまったではないか。

もう死んでしまったと思うことが第一番である。当時「人生五十、軍人半額」ということを合言葉のようにしていた。私は数え二十五歳だったので、人生を生き抜いたも同然だと自分に言いきかせた。

それから、三度三度の食事の度にも、私は「もう死んだんだ、死んだんだよ」と自分に言い聞かせたのである。故郷の親にも「決して生きていると思ってくれな、明日死ぬか、明後日死ぬかと思う切なさを捨てて下さい。件は立派に笑って死んだのだから」と手紙を書いた。不思議なもので、これが暗示と言うのか、約一カ月も過ぎた頃には、臆気ながら本当にそう思えるようになってきたのである。

また、「如何に金持ちといえども、百万円のお棺で

死ぬことはできねえだろう」と冗談を飛ばしたこともあったが、当時一式陸攻一機の値段は百二十万円だったと聞く。航空隊は若い張り切り盛りの命知らずの寄り集まりだ。遠からず同じ運命を辿るのだ。訓練の厳しさは勝つための手段で仕方ないが、やたらと、甲板整理をかけられ叩かれる。一体何のために痛い思いをさせられるのか、腹立たしくもなる。ついばやく「早く死んだ方がいい」。死んだ者が「死にたい」と思うことは「生を感じているからだ」「まだ死にきれないのだぞ」と言い聞かせる。その繰り返しが続く。これが心の葛藤というものなのだろうか。

広い飛行場に夕暗が迫る頃、今日も鹿屋の基地からは、爆弾を抱えた僚機が二機、三機と、排気管から鬼の舌のような赤い火を噴きながら飛び立っていく。白いマフラーが、プロペラの風にヒラヒラとせわしくなびく。南の空に消えて行く轟々たる爆音と機影を見送る。「帽振れ」の隊員達、私はその中に呆然として立ちすくんでいる。「ああ、彼もあれで終わりか。面白い愉快な奴だったが……」。フーツと深い溜息を吐く

と同時に、私は鼻頭がジーンと痛んで涙が出てきて仕方なかった。最後の機影が見えなくなり、静かな飛行場に帰った時、心から彼等の戦果が人であることを祈って、遮二無二、デッキへ駆け込んで気の合う友と酒を飲んで気をまぎらわせた。

我々が宮崎空へ転進ということになったのは昭和二十年一月の中旬であった。宮崎転進の頃は、第七〇八飛行隊の隊員も半数が死出の旅に出てしまい、新しく転入する丈夫達で隊内はガラリと変わった。まるで廻り舞台のようなものだった。覚えた隊員の名前も記憶に残らぬうちに、また新入隊員と交替である。

隊員には面白い風習があり、隊内の木工所へ行き思っている遺品箱を作ってもらい、その蓋に大きく「遺品箱」と書く。「大空の浪人〇〇の住人□□一飛曹」と書いておく。住人のところは常陸の国とか下総の国とか、昔の国名を用いていた。中には、辞世の句や和歌を書いておいたものである。「君の御為、国の為、命惜しまん若桜」とか「必殺轟沈、一機、一艦、見敵必殺」等の勇ましい文句を並べたりしていた。私も

「命あらば命なしとて梓弓 明日の報道きけや我が友」と記し、得意になっていたのである。

古い者が征き、新しい者が残って、転入者が来た時点では、それがその隊の古い者となる。これが僅か二カ月くらいで古くなるのだから、人間消耗の戦争ののかなさが思われる。朝食のテーブルの位置が中頃であったのが、夕食時には上の方に並び、その晩の入隊者が来て、また下へさがる。テーブルでの座る位置が常に移動している状態であった。私は生きて宮崎へ転進することになった。

宮崎空での訓練は主に編隊飛行訓練である。中攻、五小隊十五機の編隊は、傍目には見事であるが、操縦員の疲労も大変なものであった。私のような若輩者はいつも列機であり末端であるため、内側旋回時はエンジンを一杯に絞って減速せねばならぬ。まかり間違えれば追突のおそれなしとしない。これこそ、必至の訓練である。中攻隊の存亡はこの編隊の巧拙にあるとして、その訓練は厳しいものであった。

宮崎でペアの編成が発表され、一応一機一機の搭乗

組員が決まった。今までは実用機のフリーの訓練だったが、これからは各ペア毎の一機をもって常に訓練行動を共にする。私は鳥居少尉の副操縦員として乗り組むことになり、毎日訓練に参加した。鳥居少尉は第三期の予備学生であり、私の教えた飛練の同期の士官であった。教えたクラスのサブでは配置上不満だったが、致し方ないことである。

私はその後、真剣な主操縦教育を受けることになり、大変楽しくもあった。サブでなく「主操となって死ぬる」、この願いは中操縦員として当たり前のことであろう。そして訓練のため攻撃参加は遅れ、若干命が延びたわけである。

鳥居少尉のサブになった佐藤二飛曹は、私より先に攻撃を待つ運命となった。気の毒なことに、鹿屋基地で出撃のため地上滑走中、敵グラマンの掃射を受け全員戦死の悲報を聞いた。あの時、そのまま私がサブ席であったら、私はそれで終わりとなつたらう。代わりとなつた佐藤二曹に申し訳なく思っている。

陸海合同作戦の「キの六七」攻撃機が、未明の離陸

に失敗して、滑走路の先端に墜落した。大音響と共に搭載爆弾の破裂、機銃弾の炸裂と同時に機体炎上、天にもとどく紅蓮の炎は昼をあざむき、その爆発音は万雷のようであったが、近寄ることも助けることもできなかった。痛ましい犠牲である。せめてこれが敵艦船突入の戦果であったなら、パイロット達も本望であつたらうとやるせない気持ちであつた。

私はそんな事故を目の当たりに見ながら、毎日離着陸飛行訓練に、失敗のない主操縦員となるべく努力し、一カ月余りで主操を許された。主操になったばかりでは、確たるペアの編成は組めないが、メインとなればサブも付く、やっと独り歩きができた喜びが湧き、しっかりやらねばならぬという責任感を自覚する。それからの訓練は別府湾に入港していた我が空母「瑞鳳」(だったと思う)に、雷撃訓練に行つたりした。

宮崎空での雷撃の訓練について説明をする。大分空まで九州東海岸線上を編隊一個中隊(九機)で飛行、海と空の青さが綺麗で飛行機野郎の冥利につきる。大分空で訓練用魚雷を搭載、再度編隊を組んで別府湾内

の空母に雷撃敢行訓練である。各小隊は五〇〇〇メートル手前で小隊長機のバンクを合図に単機となり突っ込んで行くわけだが、その時の高度は艦橋スレスレのサーカス飛行である。偵察員の「ヨソロ、ヨイ撃て」で魚雷発射の鉤を押す。

魚雷は機を離れて、ストンと海中にもぐり込む。航跡が白く泡を立てて見える。発射時は空母の最大の有効角度を狙って投下する訳だが、空母は右に左に急角度に舵を取り、避難運動を展開して魚雷をかわす。

甲板上では水兵達が右往左往して対空射撃をしている。放った魚雷が母艦にとどくと同時に、愛機もまたその上を通過するのである。訓練と思っても、彼我攻防の実戦訓練で真剣に熱が入った。これが実戦だったらどうだろうか？と考える。あの艦橋にズラリと並ぶ銃門の弾幕をくぐる訳がない。

飛行高度は零を指している。海面を這っての魚雷発射で、甲板すれすれに飛ぶのである。反転して腹を見せても、直進して艦橋を飛び越えても、五十歩百歩助かる見込はない。母艦の両舷から撃ち出す対空砲火の

弾幕を想像する時、「一式ライター」の名をもつ愛機が、火を吹いて海上に突っ込んで行く姿が目に見え、それから数日過ぎて、昼間の雷撃はしないという作戦変更の話が出たらしい。

夜間雷撃ということになって、私は別の配置につくよう命ぜられた。夜間雷撃には照明隊が必要であったのである。僚機を誘導して敵艦船上空で、照明弾を投下する。そして夜を昼にして、雷撃隊の攻撃を容易ならしめる任務であるが、これが私の配置であった。隊内ではこれを提灯持ちと言って馬鹿にされたものである。

神の池（神栖町）基地で編成された神雷部隊第七二一航空隊のうち、訓練を終えた者第一陣二十人から我々のいる宮崎に転進してきた。「神雷」の名は「疾風迅雷」から採ったものであるが、神雷桜花攻撃隊である。昭和十九年の春、体当たりグライダー爆弾「桜花」を搭載できるよう、当時、海軍爆撃機の主力であった一式陸攻を改造し試作試験が重ねられた。

特攻の桜花隊員は、「桜花」を[㊦]と言ひ、この爆撃

機に乗り組んで、一回の投下訓練で卒業するのである。

第七〇八飛行隊からもその投下訓練に神の池基地へ行つたのである。ある日、飛行作業を終えて指揮所の前へ来たら鈴木才司上飛曹に出会った。この人は私が飛行練習生の時、台湾高雄空で教員として同じ分隊でお世話になった先輩である。その先輩が桜花隊員として転出してきたのである。

「鈴木教員……しばらくでした!」お、長沼か、しかし貴様よく頑張ったな。あれから次の練習生は意地がなかったよ。自殺者は出る、脱走はするで、罰直は禁止されたが、貴様はよく頑張ったな」の慰めの一言は何よりも嬉しい言葉であった。鈴木教員は、特攻桜花隊員として、神の池から勤務し、今死を見つめている第一陣であった。

この神雷桜花隊の第一陣の御入来によって、我が第七〇八飛行隊も、第七二一飛行隊と同一任務をもつ飛行隊に変身せざるを得なかった。今までの雷撃訓練も、提灯持ちもいらない新作戦「桜花攻撃」に変わったのである。そして、間もなく高崎空を後にして宇佐空へ

転進することになった。

宇佐空へは第七〇八飛行隊、第七二一飛行隊合わせて三十数機の一式陸攻M2であった。当時宇佐空は練習航空隊として艦上爆撃機と艦上攻撃機の実用機教程の学生が訓練中であつた。私の九三中練時代に教えたい予備生徒達も十数人いて、面会に行つて大変懐かしがられた。

その頃から空母を含む敵機動部隊が日本領海に侵入し、加えてマリアナ諸島(サイパン、テナアン等)からのB29の侵攻もあり、毎日「空襲の算大なり待避せよ」の号令があつた。周辺の民家には第三種軍装(カーキ色軍服)の兵隊が来て、この飛行場の空を守つてくれると言う。我々は朝から飛行服を着たまま、近くの駅館川土手に造つた防空壕の中へもぐり込んでしまふ。既にこの頃は、第七〇二も第七二一空も、同じ任務の神雷部隊に自然統合の形で雑居していた。

三月中旬(十七日か)指揮所の前に整列、朝の訓示を聞いている最中、突然敵艦載機十数機の空襲があつた。「グリーン」という急降下の爆音に「ダダダダ」と

銃撃である。我々百数十人の搭乗員達は、びっくりしてその場に伏せた。

拡声器から初めて「空襲、空襲、総員配置に就け」と号令がかかり、忙しくサイレンが鳴り出した。格納庫前のエプロンにバカバカと機銃弾が降り散って、コンクリートが、パッパッパッとめくり剥がれるのを見た。伏せた我々の足元から数メートルの先である。

「野郎来やがったな」と思ったが時既に遅しである。敵機は低空で機銃掃射をする。飛行場スレスレで、帽子も被らぬ操縦員の赤い顔まではっきり見える。敵にも大胆な奴がいるものだと切歯扼腕、地団駄踏んだが私は何することもできない。

勿論基地内の数個所の銃架からも応射はしたが、有効な成果は得られなかった。太陽を背にした、天利を生かした攻撃は、敵ながら天晴れと後に感心したものだ、その時の狼狽ぶりは一通りではなかった。あの伏せた時の恰好は傍目でもおかしかっただろうと思う。

足を伸ばせば足先が撃たれるかも、縮めれば腰が上がって尻を撃ち抜かれるかも知れぬ。そこで誰もが、

他人の腹の下へもぐり込もうとしてもがく。それが人情かも知れぬが、実にあさましき次第なりき、である。

最初の掃射後、反転してくる間に駆け出し指揮所裏の建物に入ろうとしたら、頭部貫通で鮮血にまみれた地整員が死んでいた。可哀想と思ったが他人ごとではない。そこを出ようとしたが出口がない。一旦来た道は恐ろしくて戻れないものだ。じっとそこで我慢していると、第二波攻撃で近くの格納庫に爆弾が投下され破裂して、私のいた建物の窓ガラスが吹き飛んだ。

「やられた」と思ったが体に異常はない。壊れた窓から跳び出し防空壕へ行ったら、中には先客がいっぱい詰まっていた。

「こんな貧弱な防空壕では一発でやられる」と咄嗟に駆け上り、飛行場の端にある墓地を目指し走り出すと近所の子供が一人、泣きながら駆けて行く、「坊やあ、坊やあこっちへ来い」と怒鳴ったが、子供は気付かずどこかへ消えていった。

石碑を盾にし、敵機の動向を追いながら、空襲下の子供や一般人のみじめさ哀れさをしみじみ感じていた。

グラマンやロッキード（P38）の執拗な三回にわたる反復攻撃は終わった。でもまた来るのではと用心しながら隊へ戻る。飛行場では擬装をしなかった一機が炎上し、改めて擬装の必要性を教えられた。

敵の空襲を受けたのは、台湾での新竹空襲と宇佐の今度で二回目である。飛行機に乗らない弱さ、だらしなさを痛感したのは私一人ばかりではなかった。

午前中の空襲で度肝を抜かれ、午後の隊員整列では敵機動部隊の動向報告があって、いよいよ緊迫感を覚え、ご恩返し「なぐり込み」に出撃命令がいつ出ても応じられる心の準備をしていた。しかし、「今度町へ出たら町の人に笑われるぞ」と話し合っていた。案の定、町へ出て一般人の攻撃を受ける破目になった。「あれだけ図体のでっかい飛行機（陸攻は大きい）が何機もあって、機銃も五門装備しているながら、飛び立ちもせず、撃ちもせず何事だ」ときめ付けられたのである。一般人からすればそう思うのは当然だ。我々航空隊の使命や、隊内の状況が分からぬのだから、弁解しても無駄、「今に見ている！やる時はやる！」と

思うだけである。

そしてその後、我々も神雷桜花出撃、特攻基地、戦場出撃等々と終戦までの生命を賭した戦いが続くのである。

【解 説】

予科練の歩み抄

予科練のゆかりの地、茨城県稲敷郡阿見町の陸上自衛隊武器学校の一隅に一九六六（昭和四十一）年五月二十七日に「予科練之碑」が建立されている。

予科練記念館「雄翔館」には次の「予科練の歩み」が展示されている。

「予科練の歩み」

昭和五年五月二十九日 海軍航空隊令改訂。航空兵力の拡充を目指す。

昭和五年六月一日 海軍練習航空隊規則改訂（予科練習生修業期間三年）。第一期飛行予科練習生横須賀海軍航空隊に入隊。

昭和十二年七月七日 日支事変勃発。木村基地より支

那海を横断飛行して中国大陸を奇襲す。所謂渡洋爆撃は世界注目の的となる（一期、二期、三期生参加）。

昭和十二年八月七日 海軍練習航空隊規則改訂。従来
の練習生を乙種飛行予科練習生とし、甲種飛行予科
練習生を加える。甲種は修業年限一年二カ月、以後
十六期まで。乙種は二年四月、以後二十四期まで。
多少の変遷あり。

昭和十二年九月一日 第一期甲種飛行予科練習生、横
須賀航空隊に入隊。

昭和十四年三月一日 飛行予科練習生教育を横須賀よ
り霞ヶ浦航空隊に移す。

昭和十年十一月十五日 霞ヶ浦航空隊より、飛行予科
練習生教育の任務を分散し、新たに土浦海軍航空隊
を開設す。

昭和十六年十二月八日 太平洋戦争勃発。わが海軍機
動部隊は長駆ハワイを攻撃して大戦果をあぐ。また
基地航空部隊は比島方面敵航空兵力を粉砕す。

昭和十六年十二月十日 マレー沖空戦。不沈戦艦ブリ
ンスオブウェールズ、レパルスを撃沈す。爾後印度

洋蘭領各要地及び豪州に航空作戦を展開し、遺憾な
くその威力を発揮す。

昭和十七年六月八日 ミッドウェー海戦。敵の反撃に
より、重大な損害を受け、遺憾ながら太平洋戦争の
転機を画す。

昭和十七年八月一日 三重海軍航空隊を開設。その後
搭乗員を緊急養成のため各地に練習航空隊を開設す。

昭和十八年四月一日 乙種（特）飛行予科練習生を採
用。岩国海軍航空隊に入隊（修業年限六月）、以後
十期まで。

昭和十九年十月二十五日 戦局の不利を挽回するため
神風特別攻撃隊を編成。戦闘機に二五〇キログラム
爆撃を装備し、体当たりを敢行。敵機動部隊を一挙
に屠る特攻作戦をレイテ湾に開始。以後あらゆる機
種を以て敢行、予科練魂を遺憾なく発揮す。

昭和十九年十一月二十日 航空機保有数低下、逆に回
天特別攻撃隊（潜水式特攻艦）を編成し、水中より
ウルシーを攻撃す。その後、震洋、海龍、咬龍、伏
龍の各特別攻撃隊を編成す。

昭和二十年三月十日 米軍B29爆撃機大編隊東京空襲。以後各地におよぶ。

昭和二十年八月六日 広島市に原子爆弾投下。一挙灰と化す。

昭和二十年八月十五日 終戦の大詔下る。我れに優秀な飛行機あらばと痛感するのみ。

満州飛行場大隊勤務とソ連抑留

栃木県 笹沼収作

私の徴兵検査は矢板の小学校の講堂で行われました。大正十一年二月二十一日、現矢板市長井一〇九で農業を営む父母の長男として生まれ、第二人の家庭でした。田圃一町歩、畑五反ですが、煙草栽培が主で、弟は無線機製造の軍需工場へ徴用され、末弟は学校へ通うという、当時としては典型的な農家でもあったでしょう。

検査の結果は予想していたとおり第一乙種合格・現

役入営ということになりました。昭和十八年二月十日、宇都宮の東部第三六部隊（歩兵第五九連隊の補充隊というか、留守部隊）へ入営、三月までは基礎教育を受けましたが、本隊の満州第二一九部隊へ行く身ですから、まあお客様待遇で、とりたてて厳しい教育は受けませんでした。その間には週一回程度の面会は許されましたし、留守宅は何とかやっていけたのであまり心配もせず、満州行きを待っていたのです。

三月になり、門司へ列車輸送されましたが、それほど嚴重な警戒でもありませんでした。満州の原隊からは赤羽少尉という中隊の教官が迎えに来られ、輸送指揮官を兼ねておられました。門司―釜山間の女界灘はそれほど荒れておらず、朝鮮を鉄道で北上、鮮満国境通過し満州のチチハル着。そこは第十四師団司令部等があり、私は歩兵第五九連隊へ入隊し、四月から正式な初年兵教育が開始されました。

留守隊のお客様扱いは一変し、教育は内務、練習共になだんだんと厳しさが増してきました。内務班は占参兵と一緒に初年兵は四人くらい、教育訓練より古兵の